「共生社会」について障がい者、高齢者、外国人の視点より

おおい町立大飯中学校　二年　網谷　香英良

「共生社会」とは、さまざまな人々がすべて分け隔てなく暮らしていくことのできる社会。そして、支える人と支えを受ける人に分かれることなく、ともに支え合い、さまざまな人々の能力が発揮されて活力のある社会と定義されています。

兄のアルバイト先に障がい者枠で雇用されている人がおられるそうです。その人は急に踊りだしたら止まらないという特徴があります。一緒にペアを組んで過ごす時、仕事が進まず困ることがあったそうです。しかし、毎日一緒に過ごしていく中で、障がいのあるその人と少しずつ打ち解けて、お互いのコミュニケーションも円滑になったそうです。その結果、作業の効率がアップして、苦にならなくなったそうです。私たちの持つ苦手意識やマイナスのイメージが相手に伝わってしまうと、緊張してスムーズな動きができなくなってしまうので、その人と普通に接してあげることが大切だと教わりました。今では、その人が真面目に毎日来てくれることに感謝しているそうです。このように、兄の職場は障がいをマイナスととらえずに、周囲が理解してサポート出来る職場であると聞きました。私たちの住む地域で、障がい者に対する理解を示し、受け入れている職場があるということは本当に素

晴らしいと思います。障がいのある人もずっと親や兄弟だけに頼り続けるのではなく、自分のできる限りの能力を発揮して、社会に出て自立の道を歩める社会になることを願っています。

インスタグラムでＧ３ソーイングというアカウントをご存じでしょうか。そこでは、とてもかわいいおしゃれながまロバックが紹介されています。実はそのがまロバックを作っているのは八十四歳のおじいさんです。おじいさんは八十二歳の時、電気工事士を退職しました。退職後は仕事が無く、ずっと寝て過ごす日々だったそうです。心配した娘さんが壊れて捨てようとしていたミシンの修理を頼みました。おじいさんはミシンを修理し、試し縫いのため娘に糸のかけ方を教えてもらい初めてミシンを使いました。その面白さにはまり少しずついろいろな作品を作るようになったそうです。おじいさんの創意工夫は高まる一方で、生地や材料を買うお金がないという問題に直面しました。それを見かねたお孫さんがツイッターのアカウントを開設して出来上がった作品の写真を投稿したとたん注文が相次ぎました。おじいさんは、

「アメリカンドリームみたいや。」

「本当にこんなじいさんが作ったものを買いたいと言ってくれる人がいて嬉しい。」

と喜んでいたそうです。退職後、抜け殻のように過ごしていたおじいさんは八十三歳にして生きがいを見つけたのです。また、お

じいさんは、
「たくさんの素敵な出会いがあり、それがどんな薬よりも効く元気の源になっている。」
とも話されているそうです。年齢に関係なく挑戦する生き生きとした姿、それをサポートする家族の姿が本当に素敵だなと感じました。定年退職した後も、その高齢者の能力や技術を生かして報酬や生きがいを得られるような仕組みを作り広めることができれば、これからの高齢社会の日本が良い意味で変わっていくのではないかと思います。今は、インターネットやＳＮＳでいろんな情報を知ることができます。便利な世の中になってこそのメリットを生かして、困っている人をたくさん手助けできたらとてもいいと思います。

母の職場にベトナムから働きに来ている人がいるそうです。慣れない日本で言葉や文化、生活習慣等の違いに戸惑いながらも、一生懸命に働いています。彼らが日本で働く理由は母国にいる自分の親や一族の生活費を稼ぐためです。自分の大切な家族のためとはいえ、日本に来て仕事をする不安は相当なものに違いありません。仕事をする中でコミュニケーションがうまくいかない時もあるそうです。しかし、その人は温かく優しい人柄でみんなから好かれ、頼りにされている大切な存在なのだと聞かされました。母の職場は言葉や人種の違いがあってもともに働ける職場で素敵だなと思いました。

障がいがあっても、何歳であっても、外国人であってもそれぞれいろいろな違いがあっても、それで良い。明るく共に助け合って前を向いて生きていける社会。どんな時も相手を思いやる優しさを忘れない社会。全ての人が限られた枠に縛られることなく同じ立場で切磋琢磨しながら成長し生きていくことのできる社会になることを私は望んでいます。